

# 大学通信教育部での社会福祉援助技術現場実習指導

—高齢者福祉分野の実習を通して—

高橋 昌子

The Guidance of Social Work Field Practice in a correspondence course of university

— Based on the welfare for the aged field practice —

Masako TAKAHASHI

## はじめに

神戸親和女子大学（以下、本学）における通信教育が開始されてから3年が経過し、いよいよ完成年度を迎えようとしている。この間、通学生とは異なる指導方法を考慮しながら、社会福祉援助技術現場実習（以下、現場実習）に取り組むべき指導を進めてきた。本紀要5号<sup>1)</sup>（以下、前号）では、通信教育部では初めての現場実習生に関する研究を記したが、本稿では現場実習生も増え、指導内容にもさらなる質の向上を心がけた研究報告を記すこととする。

## 1. 研究の目的

18歳人口減少に伴い、現役受験生の大学選択の幅は拡張されている現状と共に、社会人が大学へ進学する社会人入学に対する関心の高まりも、今日の大学受験の傾向であろう。大学のキャンパスに通う社会人学生、いわゆる通学生に対して、仕事や家庭生活を維持しながら学ぶことがより可能な、通信教育課程に進学する社会人も多い。平成20年度の学校基本調査報告書<sup>2)</sup>によれば、通信による教育を行う大学は51校（うち通信制の学部を置く大学41校、大学院を置く大学25校）となっており、平成17年度の同報告書<sup>3)</sup>の、通信による教育を行う大学は42校（うち通信制の学部を置く大学35校、大学院を置く大学19校）からも増加の傾

向がみえる。この傾向は、社会福祉を学ぶ学生にも表れており、社会人経験を活かして学びを深めていく学生の姿がある。社会福祉分野では、現場での学びは大変重要であり、現場実習の学習と経験が卒業後の社会福祉専門職としての活躍に大きな影響を与えるといても過言ではないであろう。本稿では、本学で通信教育を受ける学生に対する現場実習中の調査をもとに、現場実習の成果を高めるための指導に一考察を加えることを目的とする。

## 2. 研究方法

2008年の本学通信教育部の在籍数は1289人（2009年1月18日現在）であり、福祉臨床学科 社会福祉コース249人のうち2008年に現場実習を履修した学生は82人であった。82人中、個別指導において報告者が実習指導を担当した学生は24人であるが、本稿では高齢者福祉分野での実習生20人を対象に、現場実習前に作成する「実習生個人票」、「実習計画書」等の現場実習関連資料からのデータの抽出と、現場実習巡回指導（以下、巡回）時の聞き取りを基にした調査研究を実施した。調査内容としては、現場実習生の職歴・資格、巡回時の現場実習評価、実習指導者の資格や職種等である。

調査対象集団の性別・年齢等の属性は、以下の通りである。

1) 性別(%)

女性：男性=90：10

2) 年齢(%)

20代：30代：40代：50代：60代=5：25：30：35：5

3) 全現場実習生（通信教育部のみ）に対する高齢者福祉分野での実習生の割合

51%

4) 現場実習先種別(%)

特別養護老人ホーム：老人デイサービスセンター：  
地域包括支援センター：老人保健施設：社会福祉協議会=55：15：15：5：10

3. 研究結果

1) 職歴(%)

今回は、現場実習中も在職中の学生(80%)と、就業経験はあるが現在、定職に就いていない学生(20%)に分かれた。ここでは、社会福祉関連の職種を主として比較した。

社会福祉施設・機関(高齢者分野)：社会福祉施設・機関(高齢者分野以外)：その他

=60：5：35

2) 取得済資格(複数回答)

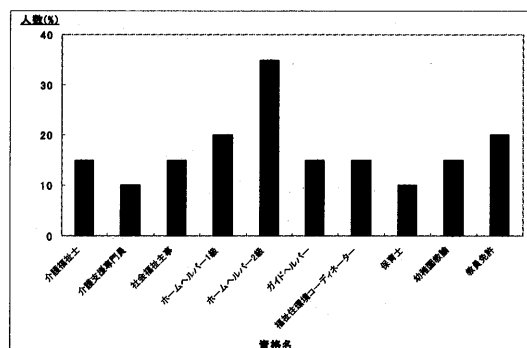


図1 取得済資格

3) 現場実習巡回指導時の実習指導教員の評価(報告者の評価)

本学では現場実習中、実習指導担当教員が1施設につき最低1回の現場実習巡回指導に赴き、各

実習生に対して、図2～5の項目をA(順調)、B(普通)、C(要指導)の3段階で途中評価として行っている(図2～5)。

① 現場実習の進行状況

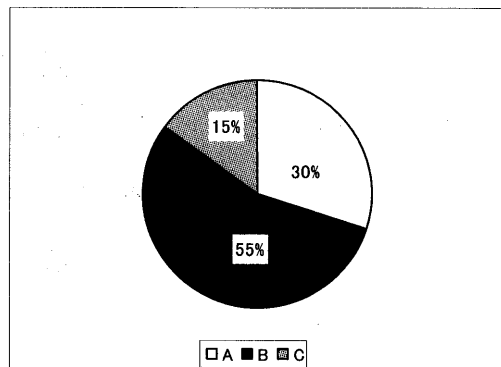


図2 現場実習の進行状況

② 施設担当者の評価

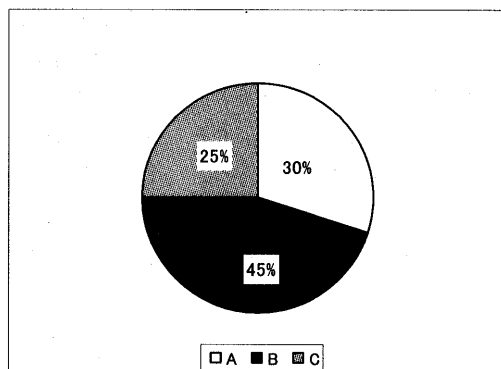


図3 施設担当者の評価

③ 現場実習生の心身状況

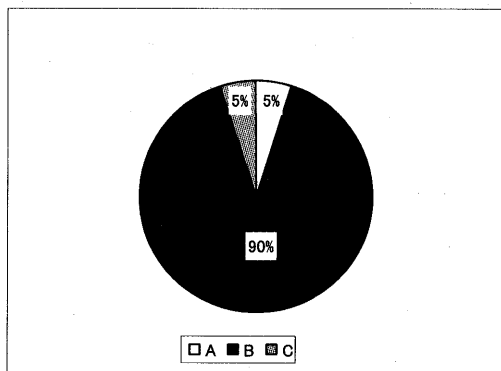


図4 現場実習生の心身状況

## ④ 現場実習日誌

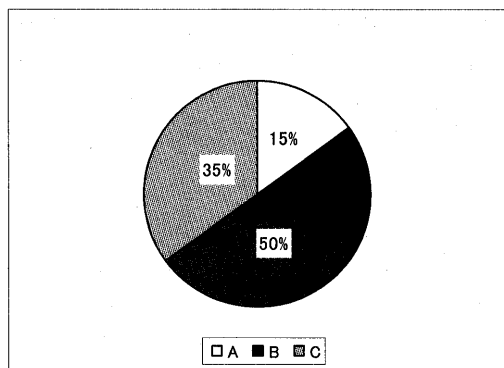


図5 現場実習日誌

## 4) 実習指導者の資格・職種

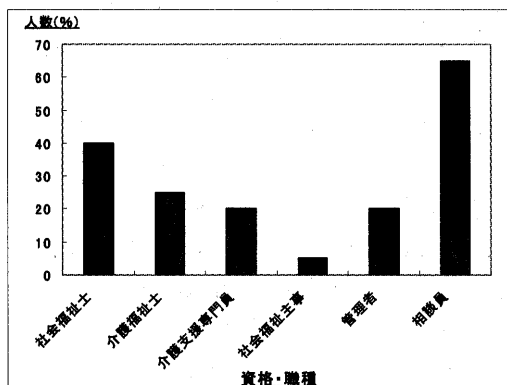


図6 実習指導者の資格・職種

## 4. 考察

本研究は、本学通信教育部における高齢者福祉分野の現場実習生を対象に、報告者1人の指導教員としての評価を使用しているため、評価基準が一定しており、1名を除き全員が女性であり性差による大きな違いがないという特徴を有するため、偏差が少ない。一方、単一大学での1年間の調査であるため、地域や年度ごとの特性等について解析する統計的な有意差を求めることは難しい。これらの点を考慮し、統計的な有意差を明確にできる研究を継続するが、本研究では調査対象となった2008年度の実習生に対する調査項目ごとに考察を加える。

## 1) 実習生の職歴について

今回は、2007年度の調査と異なり、全員就労中ではなかった。20%の未就労の学生も含め、社会福祉関連の職種を主として比較したが、高齢者福祉分野での就労経験をもつ学生が60%いる。高齢者分野以外も含め65%が社会福祉施設・機関での就労経験を有しているのが今回の実習生の特徴でもあり、高齢者施設・機関における現場実習をスムーズに開始できた学生が多かった。これは、高齢者施設・機関での業務内容や高齢者への理解を多少なりともすでに習得しており、実習前半から実習目標への取り組みも早い学生が含まれていたようである。こうした長所は実習指導により反映させたいが、実習生としての新鮮な視点が損なわれないように注意が必要である。

## 2) 実習生の取得済資格について

介護に関する資格を有する学生も多く、高齢者福祉分野では、介護の知識や技術は実習中も有効であり、現場経験と共に評価の対象となった。実習目標の遂行や利用者とのコミュニケーション、実習中の指導の捉え方等に、有資格者としての視点の高さが表れていた。木全<sup>4)</sup>は子ども領域から障害者領域、そして高齢者領域に向かうに従って、ソーシャルワークにおけるケア労働が軽視され、ソーシャルワークとケアワークを分離していく傾向がみられるとし、「基本的なケアもできないソーシャルワーカーが果たして利用者から信頼が得られるのかと考えてみる必要がある。」と指摘する。これは現場実習中に実習指導者からしばしば指摘されることでもあり、巡回の際、ソーシャルワークに関する基本的な再指導を要することもある。介護に関する資格を有していることは、高齢者福祉分野での実習を順調に行う要因とも考えられる。本学の通信教育部では社会人の占める割合が多く、様々な資格を取得している学生も多い。この特徴は、現場実習指導の実習目標や計画作成時から活かすことができると考える。有資格者としての視点の高さは、実習目標や計画の内容の深さに作用し、実習開始までの事前学習についても、

情報収集の効率化や理解の早さにつながるであろう。

### 3) 現場実習巡回指導時の実習指導教員の評価について

図2で示したように、85%が順調に現場実習を進めており、前述のように、就労経験や有資格が作用しているようでもある。しかし、2007年度の調査では表れなかったC評価が15%ある点については、指導の再考が必要である。C評価では、実習内容が実習前の予想と反する戸惑いや不満を感じている学生に対するものもあった。巡回時にそうした戸惑いや不満に対する指導を加えたことにより、後半の実習が前半に比べ改善されたケースもあったことから、巡回の重要性を強調したい。また、実習開始までの事前学習を通信教育のシステムの中にかく組み込んでいくかも課題として残った。

図3の施設担当者の評価も図2の進行状況と同様、2007年度の調査で表れなかったC評価が25%を示した。75%の学生が特別な指導を必要としない状況であったとはいえ、施設担当者からみて25%の学生に対して評価が低い背景については、「実習生自身の現場実習の捉え方に指導が必要である」との指摘と、「実習先が勤務先と同一であるため、実習生の学びの姿勢と実習指導者の指導の難しさ」が挙げられた。やはり、実習先を勤務先に設定することは避けるほうが好ましいという結果が今回も示された。

図4の現場実習生の心身状況では、ほとんどの学生(95%)が普通の状況であり、問題はなかった。しかし、5%の学生は残念ながら体調を崩し、実習期間変更等の対応を指導したことも付記しておく。仕事や家族の世話を続けながら現場実習に臨んでいる実習生も多く、健康な心身状態を保つことは重要な課題である。

最後は4項目の中でC評価が一番高い結果となった実習日誌である。B評価が50%を占め、A評価も15%ある。しかし、35%のC評価は2007年度の18%<sup>5)</sup>を上回っており、更なる指導の必要性

が表れる結果となった。今回も、巡回時での現場実習日誌の指導に費やした時間は多く、事前指導で理解、習得できていない学生が目立った。実習指導で記録の学習を前年よりも多く取り入れたが、スクーリング時のみでの指導の限界を感じる。実習終了後に行う個別の事後指導においても、記録の重要性を痛感した学生が多く、実習日誌の学習不足は実習生自身も感じている。今後は、記録に関するレポート提出や自宅でできる練習システムも視野に入れ、学習方法の工夫がさらに必要である。

### 4) 実習指導者の資格・職種について

本稿では、実習先の指導者に関する資料として職種と資格について調査を行った。その結果、図6で示したように、相談員として業務を行う職員が実習指導者の7割近くを占めており、資格としても約40%の社会福祉士が実習指導に携わっていた。本通信教育部は新設のため、過去のデータとの比較はできないが、高齢者関連の施設や機関では、これまで介護職員が実習指導を担当する場合も多かったことに比べ、社会福祉士としての相談業務を中心とした現場実習の内容が施設内でも明確になっているようである。新カリキュラムへの移行に向けて、「相談援助実習」と科目名の改正が示すような実習内容に近づいているようであり、今後は、社会福祉士の現場実習での適切な実習指導者が、これまで以上に実習生の教育に大きく関わってくると思われる。

## 5. おわりに

今回の「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正により、これまでの「社会福祉援助技術現場実習」が新たに「相談援助実習」という科目名に変更になったことから、実習内容等が明確になってきた。しかし、相談援助実習と銘打っても、実習に入って最初から相談援助を行うのはかなり困難であることは明白である。利用者との関わりとともに、現場での行動や流れの把握、様々な職種の人々

の役割分担や連携、交わされている用語の内容の理解等、それらを吸収し学ぶ必要がある。川廷は、新しい社会福祉士に求められる役割に基づく教育カリキュラムにおいても、社会人としての生活経験からの学びの部分を、4年の学部教育の範囲内でどのように補充するのかも、考えておく必要があると述べており<sup>6)</sup>、この指摘は、社会人学生の特性を活かす指導が新カリキュラムで有効なことがわかる。さらに、川廷は、社会人経験の豊富な学生の場合は、若い学生と机を並べることへのさまざまな準備など、別な視点での多少の導入教育が必要ではあろうと付け加えている<sup>7)</sup>。別の視点での導入教育の充実が、本学の通信生に対する実習指導の課題ともいえる。

現場実習指導とは、社会福祉援助と同様、対人援助行為の1つであるにとらえることができる。相談援助の方法という対人援助方法を指導するためには、現場での利用者の主体性を活かした援助

展開と同じように、学生の主体性を活かす方法で今後の指導に臨む所存である。

#### 引用文献

- 1) 高橋昌子「大学通信教育部における社会福祉援助技術現場実習指導に関する一考察」、神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要 第5号、2008年、p57-p62
- 2) 「平成20年度 学校基本調査報告書(高等教育機関)」、(株)日経印刷、2008年、p14
- 3) 「平成17年度 学校基本調査報告書(高等教育機関)」、独立行政法人 国立印刷局、2005年、p14
- 4) 木全和巳「ソーシャルケアワークの視点の重要性」、宮田和明・加藤幸雄ら編『社会福祉専門職論』、(株)中央法規、2007年、p141、p142
- 5) 高橋昌子、前掲、p59
- 6) 川廷宗之「新たな社会福祉士養成教育の教育課程」、川廷宗之編『社会福祉士養成教育方法論』、(株)弘文堂、2008年、p2
- 7) 川廷宗之、前掲、p15